地球ミュージアム紀行

動物園に動物園を見に行く

新竹市立動物園

木下直之　東京大学教授

「ミュージアム」といえば、何をイメージするだろう。
美術館や博物館だけではない、これから紹介する動物園や水族館も、じつは「ミュージアム」のひとつである。
動物の生態や生活環境も、時代を反映して変化する。
つまり、動物園は人が生き物を介し、自らが生み出す「文化」を顧みる場所でもあるのだ。

自らの歴史に向き合う

日本動物園水族館協会の創立は一九四〇年にさかのぼる。当初の会員は一九園におよび、そのなかには、今なら「日本」ではない台北市動物園と李王職昌慶苑が含まれる。前者は一九八七年に、後者は八四年に、それぞれ郊外に移転し、台北市立動物園、ソウル動物園として活動を続けてきた。台湾では、新竹にも一九三六年に児童遊楽場が開園し、園内で動物を飼育展示していたが、協会に参画しなかったのは規模が小さく、動物園を名乗っていなかったからだろう。現在の新竹市立動物園である。

さらに、上野動物園に伝わる「我邦ノ動物園一覧表」（一九三〇年作成）には、「我邦」ではないはずなのに、関東庁博物館附属動物園が記されている。旅順にあったこの動物園は、関東庁博物館附属施設として一九二四年に設置され、三二年からは旅順博物館附属動物園となった。満州国建設後は、新京にも動物園がつくられた。上野動物園園長の古賀忠道が指導し、仙台市動物園園長の中俣充志が職員を伴って渡満し、新京動植物園の園長に就任した。当時の日本の動物園では実現が困難であった無柵式の動物展示を新天地で目指したという。前者は現在の旅順博物苑区に、後者は長春動植物公園につながっている。

これらかつての「日本」の動物園のなかから、新竹市立動物園をご案内しよう。新竹は台北から南西六〇キロメートルに位置し、IT関連企業が集まっているため「台湾のシリコンバレー」とよばれる人口四〇万人ほどの活気ある都市だ。飼育動物はおよそ一〇〇種、地方都市の小さな動物園にすぎず、展示デザインも古く、およそ四〇〇種の動物を飼育展示する台北市立動物園とは比較にならない。それをあえて本欄に紹介するのは、今なお「日本」の面影を留め、それらを払拭せずに、自らの歴史と向き合う姿勢に感銘を受けたからだ。

正門は開園当時のままで、ふたつの門柱から二頭のゾウが鼻と牙を突き出している。柱の上にはライオンが向き合って座る。このデザインは、門だけであったかもしれないが、当時世界の最先端にあったハンブルクのハーゲンベック動物園のそれをモデルにしたことがわかる。ちなみにゾウが顔を出した門は、一九三三年に開園した福岡市立動植物園にも採用されており、閉園後も門だけは残り、福岡市立馬出小学校の一隅に見ることができる。

動物園は文化施設

さて、新竹市立動物園の園内では、鳥を飼ういくつかのケージに、つぎのような札が掛かっていた。いわく「歴史動物籠舎、Historic Animal Cage built in 1936」、いわく「動物園文化資産、Culture Resource of Hsinchu Zoo」。

動物園を訪れて、展示された動物ではなく、展示装置たるケージや飼育舎にその歴史の説明を目にする機会はわたしの経験ではほとんどない。わずかに上野動物園のサル山（一九三一年建設）、ロンドン動物園の旧ペンギンプール（三四年建設）や旧ゾウ舎（六五年建設）が思い浮かぶぐらいだ。上野動物園のそれは単なる歴史の説明だが、ロンドン動物園ではHeritageというタイトルを掲げていた。しかし、新竹の「動物園文化資産」はさらに踏み込んでいる。そこで事務所に尋ねると、園長自らの発案だという。

一般に、動物園というミュージアムは、生き物を展示するだけに日々の飼育に追われて、過去を振り返る姿勢に欠ける。そのうえ展示理念は時代とともに変わり、近年では動物の福祉が重視される。それゆえに展示スタイルと施設は日進月歩であり、古びればいとも簡単に壊され歴史を残さない。動物園は野生動物という「自然」にふれる場所であり、「文化」とは無縁だという誤解が蔓延している。しかし、動物園はまぎれもない文化施設であり、一方、近年では展示動物として家畜が注目されており、動物を含めて、動物園における文化遺産、文化資源を考えるときがきている。そんなことを、新竹の動物園で思った。

民博の文化資源研究センター、そしてわたしの所属する東京大学文化資源学研究室が共に用いるCultural ResourcesにCultural Resourceに近似したCulture Resourceに、思いがけないところで出くわしたことになる。

新竹市立動物園　鳥ケージ

新竹市立動物園　正門

昌慶苑動物園（当時の絵はがき）

旧福岡市立動植物園　正門

旧新竹神社石燈籠

新竹市立動物園　オランウータン放飼場